

## 第 23 話 大政奉還

幕府の威権が全く廃れて、大政を処理する実力が無くなる。薩長二藩の倒幕計画。  
 将軍慶喜が内外の時勢を察して、ついに大政を奉還する。武家政治の終り。王政復古。

慶応 3 年正月、第 122 代 明治天皇が御年 16 才で踐祚（天皇位の受継ぎ）された。天皇は孝明天皇の第 2 皇子で、名を睦仁を申し上げる。関白二條 齊敬が摂政となった。

## 幕府の無力

さきに外交問題が起こってから、江戸幕府はしきりに威信を墜したが、近く征長の軍を起こして、全く失敗に帰してからは、いよいよその衰勢が明らかとなつて、とても大政を処理する実力のないことを暴露した。折から、仮条約はすでに勅許され、外国との交際はますます盛んになろうとしていたし、それやこれやで、無力の幕府がこのまま存在していたのでは、いついかなる事でも外国に乗じられる危険がないともいえなかった。

## 薩長の倒幕計画

このころ、公卿の岩倉具視は、謹慎を命じられて蟄居していたが、つらつら時勢の変遷を察して、尊王倒幕の必要を悟るに至った折から、土佐の浪士坂本 龍馬、中岡慎太郎の両人が来て見えて、薩長の二藩が連合して倒幕の計画がある事を告げた。そこで、具視はこれに同意し、内は同志の朝臣 中山忠能、中御門経之、正親町三條 実愛らと結び、外は薩摩の西郷隆盛、大久保利通、長州の木戸孝允、広沢 兵助らと謀り、さきに長州から移されて太宰府にいた三條 実美らとも気脈を通じて、倒幕の密謀を進めた。その結果、ついに慶応 3 年 10 月 14 日、倒幕の密勅が薩長の 2 藩に下った。このころには、すでに安芸の浅野家もまた薩長の倒幕計画に加わっていた。

## 慶喜の大政奉還

これより先、土佐の前藩主山内 豊信は、薩長と同じく幕府の存在をもちや不必要とは認めていたが、兵力をもってこれを倒すことを好まなかったのも、薩長の 2 藩に倒幕の計画が整ったのを聞くと、大いにこれを憂えて、先づ幕府に政権を朝廷に還させ、事を平和の間に解決しようと、家臣後藤 象二郎を京都に遣わし、書を将軍慶喜に呈して、これを説かせた。

## 武家政治の終り

慶喜は前にも少し述べたように、すでに内外の形勢を深く察して、ひそかに決心していたところでもあったので、ここに豊信の建白書および、それに添えた象二郎らの施政の大方針に関する意見書を見ると、すなわち断然、奉還と決心して、慶応 3 年 10 月 14 日、書を朝廷に奉って大政を奉還し、政令一途に出でて、海外諸国に対する基を固くすることを請うた。実に倒幕の密勅が薩長に下ったその日です。翌 15 日、朝廷は慶喜の奏請をお許しになり、やがて密勅の実行はこれを止めさせた。時に西暦 1867

年で、家康が征夷大將軍になってから十五代 265 年で、江戸幕府はここに倒れ、昔、源頼朝が將軍となつて初めて幕府を鎌倉に開いてからは 676 年で、武家政治はここに全く終を告げたのです。

こうして慶喜が大政を奉還し、將軍職を辞すと、朝廷は勅使を後月輪陵（先帝の山陵）に遣わし、政権返上を勅許した旨を報告させ、尋いで国政の方針を議定するために、全国の諸大名に対して上京を命じた。ところが、諸大名の多くに取っては、あまりに突然の事だったので、大政奉還の趣旨が正しく理解されず、わけでも関東地方の諸大名の中には、向背に迷って、上京辞退を申し出た者さえ少なくなかった。

いわくらともみ  
岩倉具視

一方、岩倉具視は、その後は、もっぱら大久保利通らと謀って、新政府組織の準備を着々と進めていた。もともと諸大名が集まらなければ集まらなくともよいという態度を執っていたので、ついに 12 月 8 日に、朝廷が三條実美以下西走の諸卿および毛利敬親父子の官位を復して、その入京を許して同時に、具視の蟄居を免じて、参朝を命ぜられるや否や、直ちに同志の中山、中御門、正親町三條の諸卿と諮り、先づ尾張、越前、薩摩、土佐、安芸の 5 藩の兵に、その翌 9 日から、これまで皇宮の守衛に任じていた幕府方の会津、桑名、両藩の兵に代わらせることに手筈を定めた。そして翌 9 日、かねて用意していた王政復古、新政府組織に関する諸文案を携えて参内し、中山忠能、正親町三條実愛、中御門経之の諸卿と共に御前に進んで、すでに忠能から奏請して御親裁を経ている王政復古の大典を本日ご発表されるようにと奏上した。

おうせいふつこ  
王政復古

やがてお召しに応じて熾仁親王（有栖川宮）、晃親王（山階宮）、嘉彰親王（仁和寺宮、後の小松宮彰仁親王）、大原重徳、萬里小路博房らが参内し、山内豊信、島津茂久らも参朝して、前日から参朝していた徳川慶勝、松平慶永、浅野長勲（安芸の藩主）らと共に御学問所に伺候した。

天皇は、すなわちご親臨されて、ここに王政復古の大号令を発し給い、摂政、関白、征夷大將軍、議奏、武家伝奏、守護職、所司代などの官職を廃して、新たに総裁、議定、参与の 3 職をおき、万事、神武天皇の創業の昔に基づいて、上下の別なく至当の公儀をつくり、天下と安危を同じくするようにと諭された。

こうして総裁には、有栖川宮熾仁親王を任ぜられ、議定には嘉彰親王、晃親王、中山忠能、正親町三條実愛、中御門経之、徳川慶勝、松平慶永、浅野長勲、山内豊信、島津茂久の 10 人を任じ、参与には大原重徳、萬里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本実麗の五卿の外に、尾張、越前、薩摩、土佐、安芸の五藩から各々 3 人づつ、合わせて 15 人の藩士をもってこれに任じた。西郷隆盛、大久保利通は薩摩藩から、後藤象二郎は土佐藩から入ってこれに列した。ここにおいて万機は天皇に決し、政令はことごとく朝廷から出ることとなったのです。世にこれを王政復古、または王政維新と言います。

なお、この日、中川宮朝彦親王、摂政二條齋敬以下佐幕派の公卿 20 余人の参朝を停めて、これ

## 第23話 大政奉還

に謹慎を命じられたが、又、前にもいったように、会津、桑名の2藩の皇宮守衛をも免じた。即ち、新政府は、全く幕府方の勢力を一掃したところに組織されたのです。

しかし、一方慶喜は、大政を奉還し、將軍職こそこれを辞したが、なお位は正二位、官は内大臣で、旧幕府直轄の領地はそのまゝ慶喜はこれをもっていたし、諸大名の中にも徳川氏の恩顧を思うものが少なからずいたので、これをそのまゝにしておいたのでは、王政復古も名義ばかりで、その実がこれに伴わぬい虞があった。

### 小御所会議

そこで、この12月9日の夜に、天皇が小御所に出御され、3職の人々を召して、王政第一着の会議を開かれると、忽ち徳川氏の処置の問題が出た。慶喜に勧めて大政を還させた土佐の山内豊信や、御三家の尾張の徳川慶勝、親藩の越前の松平慶永らは、慶喜をも召して大政に参与させるようにと主張したが、さきに倒幕を企てた岩倉具視ら1派の諸卿および薩摩藩、安芸藩の人々は、どこまでもこれを排して、大いに激論を交わした末に、ついに慶喜にその官を辞させ、領地を返上させる事に決して、その日の議事を終わった。

### 長州藩士の入京

折から、長門藩の兵もまた上京して来て、10日には相国寺内に陣したので、朝廷はこれに九門内外の見廻りを命じ、なお緩急に任せて相励むようにとのおぼしめしを伝えた。これより長門藩は薩摩藩と心を協せて、大いに京都の政界に活躍することになったが、これより、反幕府の勢力が一段と強くなったのはいうまでもありません。

### 慶喜の退京

これより先き、慶喜のいる二条城の内外には、皇室守衛の任を解かれた会津、桑名の二藩の兵を始め、譜代親藩の藩士や旗本などが、凡そ一万ほども集まって来ていたのですが、彼等はいづれも心中ひそかに慶喜の大政奉還を喜ばなかったのに、今、また新政府の徳川家に対する圧迫を聞いて大いに憤慨し、今にも起って薩長と戦おうとした。しかし、慶喜は、飽くまでもこれを慰撫して、ついに大事の起こらないうちにと、大阪城に退いて人心の沈静を図った。

### 慶喜の恭順

ところが、その後の事の成行きから、ついに部下の者らに押立てられて、再び京都に入ろうとしたので、薩長の兵に迎撃たれて、ここに鳥羽、伏見の戦いとなり、敗れて江戸に逃げ帰ってからは、心にもなく朝敵の汚名を受けた。けれども、慶喜は深く前非を悔い、ひたすら恭順の意を表して、江戸城を潔く官軍に明渡し、謹んで罪を謝したので、徳川家も絶えることなく、江戸の市民も幸いに兵火の難を免れた。

### 戊辰の役

## 第23話 大政奉還

しかもなお徳川氏の旧恩きゅうおんを思って、反抗した者があったので、江戸には旧幕臣きゅうぼくしんの彰義隊しょうぎたいの戦たたかいがあり、つづいて奥羽には、諸藩が連合して官軍に抵抗した所謂奥羽戦争いわゆる おう せんそうがあり、更に旧幕臣の函館ごりょうの五稜郭かく よに拠った函館戦争はこだてせんそうがあった。このうち、奥羽戦争で、会津の若松城わかまつじょうが官軍かんぐんに囲まれた時に、藩中の少年のみで組織した白虎隊びやくこたいの1団が、華々はなばなしく戦って多くは戦死し、生き残った16人が城東の飯盛山いもりやまに登って、火の手のあがった城をはるかに擗して自殺した話は、とりわけ世に名高い。

### 全国平定

こうして最後の函館戦争が終わって、全国がことごとく平定したのは、王政復古の大令を発せられた翌々年の明治2年5月でした。世に鳥羽伏見と ぼ ふ し み た た かの戦しよえきい以後の諸役を総称そうしょうして維新の戦乱いしん せんらんを言い、又、戊辰ぼしん えきの役とも言っている。

勿論もちろん、これらの諸役は大政奉還たいせいほうかんに随俯ずいふして起きた幕府の跡始末あとしまつですから、ここに続けてお話しするべきですが、この巻はすでにご覧の通り大冊だいさつともなったし、又、一方から見れば、これらの諸役は王政復古しよえき おうせいふっこの発令はつれい以後の出来事でもあるので、ここでは割愛かつあいして、次の「東京時代」の始めに、改めてもう少し詳しくお話しします。

( 第23話 大政奉還、第五巻 終わり。 次は前頁に戻り、第六巻 東京時代 に )